

研究課題名：相談支援センターの機能の強化・充実と地域における相談支援センターのあり方に関する研究

課題番号： H21ーがん臨床ー一般ー003

研究代表者：国立がんセンターがん対策情報センターがん情報・統計部診療実態調査室
室長 高山智子

1. 本年度の研究成果

本研究の課題は、がん診療連携拠点病院の相談支援センターの機能の強化・充実と地域における相談支援センターのあり方を検討することである。その具体的な課題として、本年度実施したのは、1) 相談支援ツールの開発と評価、2) 患者団体等との連携のあり方、3) 院内外における相談支援センターの機能、役割と位置づけに関する検討である。

1) 相談支援ツールの開発と評価

相談支援センターの業務の効率化、業務分析や評価等に使用可能なツールを検討するために、相談業務に役立つツールとして、相談記録データベースと相談FAQデータベースの2つの情報集積のためのツール開発を試みた。

汎用性・効率性・費用の問題を検討し、データベースソフト FileMaker Pro10.0 Advanced を使って、データベースソフトがなくても稼働可能なランタイムアプリケーションとして作成し、改良を加えたベータ版を希望者に配布し、評価検討を開始した。相談記録ツールに関しては、レイアウトページは、受付、相談基本情報、相談内容、相談評価、調査票用集計票、相談集計とした。また相談内容の記録は、自由記載で相談内容・対応内容を記載する形式と、フォーカスチャータニング形式の記録画面も準備し、使用者が選択できるようにした。相談FAQツールは、自院の情報、自院の医療費概算、医療・生活情報、地域の社会資源、他施設情報の5つのデータベースからなるツールを準備した。

2) 患者団体等との連携のあり方の検討

がん対策推進基本計画で検討課題として掲げられている患者団体等との連携について、既に基礎研修3を修了しがん相談支援において指導的な立場の者(38名)を対象にワークショップを行い、がん対策情報センターの相談員基礎研修会で実施されているがん専門相談員向けの「がん体験者との協働」を軸にした「新たな支援プログラム」構築の効果的な学習方法の工夫や改善点について検討した。その結果、明確にしなければならないポイントとして、参加者のピア・サポートの有効性の経験的な認識、ピア・サポートを提供したいというがん体験者のニーズを大切にす視点、知識やスキルの必要性など、「新たな支援プログラム」の構築をテーマとした研修における更なる工夫や改良点が明らかとなった。

3) 院内外における相談支援センターの機能、役割と位置づけに関する検討

本年度は、相談支援センターの実態を把握することを目的として、既存の相談支援センターに関するデータの二次的な分析と相談支援センターへの訪問聞き取り調査を開始した。

厚生労働省委託事業として実施されているがん医療水準の均てん化を目的とした医

療水準等調査事業「がん診療連携拠点病院の緩和ケア及び相談支援センターに関する調査」結果を許可を得て入手し、相談支援センターの機能の充実度について分析を行った。充実度を左右する背景因子について得点化し、医療機関ごとの相談支援センターの機能の充実度について比較を行った。現時点ですべてが明確に説明のつくものではないが、分類された8つのクラスター間では、全体に相談支援センターの機能が比較的充実している医療機関群、逆に、すべてにおいて機能の充実が不十分な群など、それぞれの群ごとの特徴がみられた。さらにこのような特徴がなぜみられるのかについて、二次分析の結果を参考にして訪問先を選定し、聞き取り調査を開始した。充実度を左右する要因をさらに追加し、二次分析結果による数値で抽出される結果と、聞き取り調査による質的な調査結果を組み合わせることによって、全国の相談支援センターの機能や役割の違いが明らかとなり、その地域に求められるニーズや病院にあった相談支援センターの充実に向けて、相談支援センターとして担う範囲や課題がさらに明らかになってくると考えられる。

2. 研究成果の意義及び今後の発展性

多様な業務内容を、多職種が協働して業務を実施する相談支援センターにおける業務内容を電子データでデータベース化することで、検索やデータ抽出が容易となる。また相談記録ツールは、エクセルなど他ソフトに落としての相談内容の分析や相談項目別件数の集計など、業務の効率化・業務改善につなげるツールとしても期待でき、相談FAQツールについても同様に、情報を集積することで、情報検索時間の短縮化、他部署や他施設への確認作業の簡略化などが期待できる。今後、ツールを定めてデータを共有・蓄積することは、相談対応の質の向上に役立つと考えられる。

全国の相談支援センターでは、地域差もあるがこれまでに患者団体等との連携の経験がないところが多いと考えられる。患者団体との連携の仕方にはどのようなものがあり、新しいプログラム構築について具体的にどのように実施していくかを事前に学習しておくことは、相談員のみならず、地域で連携を求める患者団体等にとっても有用であると考えられる。今回の検討は、効果的に学習するためのプログラムをさらに発展させていくために有効であり、効果的なプログラム提供につながるものと考えられる。

相談支援センターの機能の強化・充実のための検討や地域における相談支援センターのあり方を検討するにあたり、本年度は実態を把握することに焦点を当てた。相談支援センターが現在直面している問題点や課題は、単にそこで従事している相談員だけで解決できることとは限らず、現実の課題を多角的に描写し分析することが、今後の相談支援センターの体制構築を効果的に進めるために役立つと考えられる。また、地域の中での相談支援センターの位置づけやあり方を明確にしていくことで、地域の拠点として効果的に相談支援センターを運用・運営していくことが可能となり、がん医療における情報提供と相談対応の均てん化に帰することが期待される。

3. 倫理面への配慮

本研究の実施で用いたデータは、ワークショップから抽出された内容、また二次分

析結果である。また相談支援センターへの聞き取り調査に関しては、個人の情報や背景を問うものではなく、相談支援センターの運営に関わる組織要因を探索する研究であり、倫理上の問題はないと考えられるが、すでに公表されているデータ以外のものを取り扱う際には、施設名はコード化して扱うとともに、個人が特定できないよう留意を払い、さらに公表を行う際には、事前に、施設からの承諾をとり実施していく。

4. 発表論文

- 1) Miyakawa K, Tarao K, Ohshige K, Morinaga S, Ohkawa S, Okamoto N, Shibuya A, Adachi S, Miura Y, Fujiyama S, Miyase S and Tomita K: High serum alanine amino-transferase levels for the first three successive years can predict very high incidence of hepatocellular carcinoma in patients with Child Stage A HCV-associated liver cirrhosis. *Scandinavian J Gastroenterology* 44:1340-1348, 2009.
- 2) Numasaki R, Miyagi E, Konnai K, Ikeda H, Yamamoto A, Onose R, Kato H, Okamoto N, Hirahara F and Nakayama H: Analysis of stage IVB endometrial carcinoma patients with distant metastasis: a review of prognoses in 55 patients. *Int J Clin Oncol* 14:344-350, 2009
- 3) Sakuma Y, Okamoto N, Saito H, Yamada K, Yokose T, Kiyoshima M, Asato Y, Amemiya R, Saitoh H, Matsukuma S, Yoshihara M, Nakamura Y, Oshita F, Ito H, Nakayama H, Kameda Y, Tsuchiya E, Miyagi Y. : A logistic regression predictive model and the outcome of patients with resected lung adenocarcinoma of 2cm or less in size. *Lung Cancer*. 65(1):85-90, 2009.
- 4) Okamoto N, Miyagi Y, Chiba A, Akaike M, Shiozawa M, Imaizumi A, Yamamoto H, Ando T, Ymakado M and Tochikubo O: Diagnostic modeling with differences in plasma amino acid profiles between non-cachectic colorectal/breast cancer patients and healthy individuals. *Int. J. Medicine and Medical Sciences* 1:1-8, 2009
- 5) 唐渡敦也:「提言1 : がん医療を変えるために」, 「メディカルタウンの対話力」30年後の医療の姿を考える会編, p42-p52, 2009
- 6) 高山智子, 祖父江友孝: .諸外国のがん対策の現状ー成熟したシステムのために. 第I部各国のがん対策. 1. オーストラリアのがん対策. オーストラリアのがん対策の歴史. 癌の臨床. 第55巻(7), 69-73, 2009.

5. 研究組織

①研究者名	②分担する研究項目	③最終卒業校・卒業年次・学位及び専攻科目	④所属研究機関及び現在の専門(研究実施場所)	⑤所属研究機関における職名
高山智子	相談支援センターの機能の強化・充実と地域における相談支援センターのあり方に関する研究	東京大学大学院医学系研究科・平成14年修了・保健学博士・健康科学・看護学	国立がんセンターがん対策情報センターがん情報・統計部診療実態調査室	室長
石川睦弓	相談支援ツールの開発と評価	筑波大学大学院教育学研究科・平成12年卒・カウンセリング修士・がん看護学	静岡県立静岡がんセンター研究所 患者・家族支援研究部	部長
菊内由貴	相談支援ツールの開発と評価および相談員の継続教育方法の検討	千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程・平成14年修了・成人看護学	独立行政法人国立病院機構四国がんセンターがん相談支援・情報センター	がん相談支援係長、副看護師長
大松重宏	相談員の継続教育方法の検討および患者団体等との連携のあり方の検討	ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科・社会福祉学専攻博士前期課程平成20年修了	国立がんセンターがん対策情報センター	研修専門官
朝倉隆司	患者団体等との連携のあり方の検討	東京大学大学院医学系研究科・昭和62年(単位取得満期退学)・保健学博士・医療社会学、精神保健学	東京学芸大学医療社会学、保健医療行動科学	教授
岡本直幸	相談支援センターの院内外を含めた機能と役割、位置づけに関する検討	千葉大学理学部昭和49年修士・医学博士・公衆衛生学・疫学	神奈川県立がんセンター臨床研究所がん予防情報研究部門生物統計学・疫学	部門長
唐渡敦也	相談支援センターの院内外を含めた機能と役割、位置づけに関する検討	東京慈恵会医科大学・昭和61年卒業・医師	財団法人 癌研究会 有明病院 医療支援センター・企画部	センター長
須田木綿子	相談支援センターの院内外を含めた機能と役割、位置づけに関する検討	東京大学医学系研究科保健学専門課程・昭和62年修了保健学博士・保健学	東洋大学社会学部高齢者福祉・非営利活動論	教授